

江華島事件(上)

日本が仁川に強く関わったのは明治8年(1875)から太平洋戦争が終わった昭和20年(1945)までの70年だった。この間、多くの出来事があり、多くの人がこの街に住み思い出を作っていた。我々がジンセンと呼んだこの街の、その当時のさまざまなことをここに綴ってみたい。

明治8年というのはいわゆる江華島事件が起きた年である。江華島事件というのが実際のメイン舞台になったのは永宗島、現在インチョン空港ができていいる島である。この事件を契機に日朝修好条規が結ばれ、釜山、仁川、元山の三港が開港されたのだから、歴史上重大な事件だった。

日本は明治維新の後、かつての日本同様鎖国を続けている隣国李氏朝鮮を開国させようと働きかけていた。しかし明治天皇名で送った国書に対して朝鮮は「皇という字は中国の皇帝しか使ってはならない文字である」とか「勅という言葉は中国皇帝が臣下に対して使うものである」と難癖をつけ国書の受け取りさえ拒否し続けた。日本では征韓論が強まった。日本の対朝鮮外交は対馬の宗氏が行っていたが、明治政府は政府直轄に改めることにし、使節として花房義質を派遣した。ところが花房が洋服姿で訪れたため「日本人がなぜ洋服なのか」といぶかり交渉は進展しなかった。

業を煮やした明治政府は雲揚、第二丁卯の二隻の軍艦を派遣、沿岸の測量を開始した。東海岸では火事を発見して消火に協力したり、水の補給を要請して賄賂を要求されたので慶州県令に直談判したりするなどの出来事があったようだ。

西海岸に回り、済物浦(仁川)の月尾島沖に雲揚を停泊させ、水を探すため数人がボートで江華島方面に向かっていたところ同島の砲台から突然砲撃された。雲揚の井上良馨艦長の報告書によると事件発生は9月20日午後4時30分だった。ボートは直ちに引き返し全員無事だった。

翌21日、雲揚は問責のため江華島に近づくと砲撃戦になり、日本側は江華島の砲台を破壊した。上陸を試みたものの海岸が遠浅で不可能とわかり、その日の戦闘は終わった。

22日、雲揚は江華島南にある永宗島の第一砲台に向かい上陸を敢行、わずか8分の戦闘で砲台を占領した。日本兵は戦死者1人、負傷者1人、朝鮮側は戦死者35人、捕虜16人だった。兵は23日撤収した。

江華島事件(下)

江華島事件について李氏朝鮮は当初「日本の船とは知らなかった。欧米の船だと思った」と弁解した。確かに朝鮮半島では1866年、アメリカのシャーマン号が大同江を平壤付近までさかのぼり兩岸を荒らす事件があり、ナポレオン3世治下のフランスもまた同年秋、横浜に駐屯していた600人の陸戦隊を江華島に上陸させ江華城を占領した。李氏朝鮮は1000人の獵師による決死隊を編成、夜襲をかけて撤退させた。1871年にはまたもアメリカが開国を迫って軍艦6隻で来航、江華島を襲い二つの砲台を占拠した。このときは守備隊が夜討ちをかけ、撃退している。事件が相次いだうえ、朝鮮に野心を持っていた英、米、仏、露はひっきりなしに沿岸の測量をしていた。

このほかドイツ商人オツベルトはイギリスから武装船を借りて漢江をさかのぼり、開国を要求したが、李氏朝鮮は「わが邦は清の属国であるからまず清国の許可を取って来い」と追い返えされている。李氏朝鮮が首府・漢城(現在のソウル)防衛線といえる江華島に厳戒態勢を敷いていたことは間違いない。

だが雲揚は日章旗を掲げており、李氏朝鮮の主張は退けられた。結局日朝両政府とも偶発的な事件として処理にあたることにした。しかし現代の歴史家の見方は違う。特に韓国の学者は「日本が意図的に挑発行為を行った」とみている。確かに独立国の沿岸を測量するというのは、英米などにならったとはいえ挑発行為といえるだろう。たまた事件後、国書の文字に対する反発はなくなり、服装への苦情も言わなくなった。

日本は事件についての明確な謝罪を要求したが李氏朝鮮はなかなか応じようとしなかった。そこで明治政府は

黒田清隆を全権大使に、井上馨元老院議員を副大使にし、7 隻の艦隊を引率する形で訪朝させた。軍事力を背景にした交渉が江華島で行われ、結ばれたのが日朝修好条規、通称江華条約である。

主な内容は①釜山のほか二港を開港する②開港場には日本人の居留地を認める③居留民を管理する管理官の常駐を認める④居留地での日本の貨幣流通を認める⑤日本居留民が犯罪を犯しても朝鮮政府は手出しできないいわゆる治外法権を認める⑥日本から朝鮮に輸出する商品は非課税とする——などだった。釜山以外の開港場所は京畿、忠清、全羅など五道のうちから二カ所を選べと日本の選択に任されていた。朝鮮が外国と結んだ最初の条約だが、かなりな不平等条約であることは認めなくてはならない。

日本が朝鮮を開国させたことは世界を驚かせ、漢米修好通商条約が 1882 年、仁川で締結され、その翌年漢英修好通商条約が結ばれた。続いてイタリア、フランス、オーストリア、ベルギー、デンマークの順で結ばれている。韓国を属国とみなしていた清国は、条約は締結せず常に他国と同じ権利を主張、認めさせている。

開港地選定

江華条約で釜山のほか京畿、忠清、全羅、慶尚、咸鏡の五道のうちから二カ所を選べと選択を任された明治政府は、調査、検討を花房義質公使に命じた。公使はまだ漢城(現ソウル)に常駐できず問題がある場合に訪朝することになっていた。朝鮮半島の東側、すなわち日本海側の港は元山にすることでほぼコンセンサスが出来ていたから、花房は何回も訪朝し西海岸を集中的に調査した。

西側の港の第一条件は、首府漢城の表玄関にふさわしい港であることだった。そういう視点で残った候補地は仁川と忠清南道の牙山だった。仁川の利点はなんといっても漢城に近いことである。しかし大きな欠点があった。干満の差が 10~12 メートルと大きく、干潮時には数キロ先まで浅瀬になりなかなか活動できないことだった。日本国内では海軍が仁川に絶対反対の立場だった。また日本から地理的に近い牙山すべきで、仁川にすると清国を有利にするだけ、という意見もあった。

一方の牙山は地形としては申し分なかった。ただ漢城までの距離が仁川より 4、5 倍もあるのが欠点だった。

花房公使は比較検討の結果、一時は牙山に軍配を上げるつもりになったという。アメリカとフランスが作成した測量図を手に入れ調べてみると、牙山は港として適していることが判ったからである。しかし公使は念のため船に乗って牙山湾を往復してみた。すると時間帯によって激しい海流が生じ、危険性があると判明した。

花房公使が漢城に常駐し始めたのは公使館が完成した明治 13 年(1880)からで、直ちに元山の開港が決定した。釜山港は明治 9 年(1876)の日朝修好条規締結後、まもなく開港している。しかし仁川についてはなかなか決まらなかった。花房公使自身がまだ迷っていたためでもあった。

恐らく花房公使は常駐になったあと漢城—仁川、漢城—牙山を何回か往復したに違いない。そうして 13 年の秋には仁川にすると決めたのであった。

朝鮮政府の中では、仁川は漢城に余りにも近すぎ、危険であるという意見がかなり強かった。また開港に反対する忠清道、慶尚道の農民 2000 人が漢城近郊に集結し「仁川開港反対」を叫ぶという当時としては珍しい事件もあった。首府近くに港ができると米が大量に輸出され首府は飢饉に襲われる、というのが反対の理由だった。漢城を含む京畿道では米の収穫が少なく、毎年、米不足が続いていた。

花房公使はこうした反対意見にも一理あるとし尊重、仁川からの米穀輸出は当分禁止すると約束し 14 年の春、仁川開港の了承を朝鮮政府から取り付けたのである。開港は 15 ヶ月以内という期限まで付けさせている。

壬午軍乱と済物浦条約(上)

仁川の開港が決まると、花房義質公使は日本人居留地を定めるため公使館員とともに屢々仁川を訪れていた。港に隣接した海岸線から、港を一望できるよう現在の自由公園になっている丘の西北斜面地を居留地と決め、明治15年(1882)7月23日、御用係の杉村濬(ふかし)、久水三郎たち数人で縄張りとは杭打ちを行った。壬午軍乱が起きたのはまさにその日だった。

壬午軍乱というのは朝鮮の正規軍の反乱事件、一種のクーデターである。当時の朝鮮政府は国王・高宗の后で開国派の閔妃が実権をにぎっていたが、守旧派で国王の実父である大院君と鋭く対立していた。閔妃は花房公使の助言に従って近代的な陸軍を作ろうとし、教官として日本から堀本礼造少尉を招き、両班階級の子弟中心に別技軍という新しい軍隊を創設した。別技軍への給料(米による現物支給)は高く設定されたが元からの正規の軍人への給料は安いままで、しかも13ヶ月も支払いが滞っていた。

たまたまその7月23日、正規軍に1年ぶりに支給された米には大量の砂が混じっていた。役人が米を抜き取り、代わりに砂を混ぜたのだった。いずれ失職するのではないかと不安に思っていたところにこの問題が起き、怒った軍人たちは一斉に蜂起、市民も加わって別技軍を襲い堀本礼造少尉を殺害したのである。反乱軍は続いて閔妃の一族の邸宅を襲い政府高官を殺戮した。

日本公使館に一報が入ったのは昼過ぎだった。堀本少尉のいる別技軍の本部からで、現在襲撃を受けている最中であり日本の公使館を襲うと言っている注意してほしい、というものだった。

反乱軍は午後5時ごろから公使館を包囲しはじめ、侵入を試みた。公使館付き武官や警察官が必死になって防いだが、まず周囲の民家が放火され、深夜の午前零時、ついに公使館にも火がつけられた。公使館では危険になったため花房公使たちは正面突破を試み玄関から打って出たところ、反乱軍は逃げまどい無事脱出できた。

花房公使は「死ぬのなら国王とともに」と王宮に向かったが門は堅く閉ざされていた。仕方なく仁川を目指して歩いていると、居留区の縄張りを終え、急を聞いて漢城に戻る途中の杉村、久水たちに遭遇、そろって仁川へと逃げた。しかし仁川でも反乱軍に襲撃され、戦いながら小舟を探して月尾島に渡り、手頃な船を調達して海上に脱出、3日間漂流したあとイギリスの測量船フライングフィッシュ号に救助された。船長は最初怪しんだが、日本の公使で事件に巻き込まれたと知ると「どこにでも送り届ける」と申し出、長崎まで乗せてくれた。一行が長崎に帰り着いたのは7月29日の23時30分だった。

花房公使は長崎から電報で井上馨外務卿に報告、明治政府は事件から6日経ってようやく知ったのだった。

壬午軍乱と濟物浦条約(下)

壬午軍乱についての花房義質公使の電報を受け取った明治政府の危機意識は、当然のことながら大変なものだった。単に公使館が襲われたというだけでなく、これまで朝鮮の開国・近代化を援助してきた我が国の努力が水泡に帰すかもしれない重大な事態だったからである。

そこで政府は仁禮景範少将率いる軍艦4隻と海軍陸戦隊、高島鞆之助少将率いる陸軍計1000人を公使に委ね、帰任させた。仁川には8月12日到着したが、すでに清国の軍艦3隻と汽船数隻が停泊していた。反乱は清軍によって鎮圧されていたのである。日本側の死者は堀本少尉をはじめ、語学生を含めて十八人だったことも判明した。

事変に際し閔妃は漢城に滞在していた清の軍人、袁世凱に助けを求め、袁は直ちに本国から2500人の兵を呼び寄せ乱を鎮めたのだった。海軍は水師提督丁汝昌が、陸軍は馬建忠が率いていた。壬午軍乱は清国にとって朝鮮での権益を確保する絶好の機会であると当時の権力者、李鴻章が即断したからだった。袁は高宗の父、大院君が政権奪取を狙って反乱軍を動かしていたと見抜き大院君を拘束、清に連れていき天津で幽閉した。袁世凱はその後数年、朝鮮の政治を思いのままに動かす存在になっている。のちに中華民国大統領にもなった。

花房公使は8月17日漢城に行き国王に謁見を求め、20日、謁見が実現した。その際、公使は壬午軍乱の責任

を追及する日本側の要求書を提出、3 日以内に回答するよう要請した。しかし期限が過ぎても回答はなく公使は「帰国やむなし」と言い残して仁川に引き揚げた。

24 日の午後、仁川にやってきたのは袁世凱の秘書役のようにになっていた馬建忠で、局中調停を申し出たのである。花房公使と馬建忠は 2 日にわたり協議を重ねている。日朝間で締結される条約の内容について突っ込んだ意見交換が行われ、条約案には清の意向も反映されたと推定される。馬建忠は漢城に引き返したがそれでも朝鮮政府の回答はなく、催促したところ 28 日になって 2 人の全権大使がやってきた。清国の圧力もあったのだろう。李氏朝鮮は日本だけでなく清国の軍事力の恐怖にもさらされていた。長い交渉の結果、31 日の午後、調印式が行われたのが済物浦条約である。まだ開港前だったので済物浦の地名が使われた。

条約の主な内容は、朝鮮政府は遺族・負傷者への見舞金 5 万円、損害賠償 50 万円を支払い、日本公使館護衛のため漢城に軍隊の駐留を認めるというものだった。首府に軍隊を置くというのは大変な権利だったが清国も同じような権利を手にし、日清の対立へとつながっていった。なお日本は損害賠償金について 10 万円を受け取るにとどめ、あとは内政に使えとって放棄している。

花房公使が仁川に逃れて来て暫く滞在、反乱軍と戦った周辺はのちに花房町という地名になって残され、花房公園も存在した。

仁川開港

壬午の軍乱の影響もあって仁川開港はやや遅れ、明治 16 年(1883)1 月となった。開港と同時に、文覚山の山麓にあった行政機関の仁川府を港に移すということになり、済物浦という地名も仁川府に改められることになった。

花房公使は開港に備え日本人居留地約 7000 坪の区割りのほか、朝鮮政府の税関をどこにするかということを含め、仁川の都市計画といえるものを作成していった。居留地は朝鮮政府からの借地で、地代は 2 メートル四方で朝鮮銅貨 250 文だった。当時の為替レートは 1 ドル 500 文だったという記録があるから、現在の貨幣価値でどのくらいになるか計算していただきたい。

そのころの仁川の様子については、当時公使館の一員として花房公使と行動を共にし、のちに仁川府尹(ふいん=市長)になった久水三郎が「英国領事館(現在オリンポスホテル)ができたあたりに民家が 14、5 軒ばかり、また萬石洞に 4、5 軒あるだけの寒村だった」と書き残している。

急がなくてはならないのは領事館の建設だった。港が出来れば輸出入関係の業務が発生するし、居留地に日本人が住み始めるとその管理が重要な業務になる。居留民に対しては現在の市役所のような行政だけでなく警察権も司法権も持つ。居留地の領事はオールマイティーの権限を発揮できるのである。初代の領事には開港前の明治 15 年 4 月、公使館員だった近藤真鋤が任命されていた。

近藤領事は壬午の軍乱騒ぎが落ち着いたころから、バラックの仮庁舎で業務を開始したようである。場所は元の仁川府庁(現中区庁)前の道路を挟んだ向かい側だった。領事館には警部以下 6 人の警察官と医官が常駐、留置所、監獄や診察室もあった。本庁舎は日本人居留地の最も高いところ、のちに仁川府庁になった場所に建てられた。花房公使の指示により全て日本の木材を使い、内地で加工、切り込んで輸送し、仁川では組み立てただけだった。突貫工事の結果天長節(天皇誕生日)前日の 11 月 2 日に竣工している。

もうひとつ必要なのは金融機関だが、これは第一銀行が釜山支店の仁川出張所を開設した。しかし開港が近づいているというのに朝鮮政府はインフラ整備などを行わないため、埠頭や荷下ろし場などは日本側で工事せざるをえなかった。このため仁川開港会社を設立して運営する案が検討されたが資本金 10 万円が必要と分かり頓挫した。そんな大金を出資できる民間人はいなかった。結局、応急対策として簡単な貨物置き場の設備を整えるにとどまった。貿易がそれほど伸びるという予想はなかったため、本格的な港湾設備は後の大規模築港計画まで待たなくてはならなかった。

仁川にとって恩人とも言える花房公使は仁川開港後まもなく駐露公使になりサンクトペテルブルグに赴任している。その後枢密顧問官、日本赤十字社長など歴任、子爵に叙された。